

# 中学生における学校適応感に影響を及ぼす要因（3） —一部活動適応感及び総合学校適応感について—

The Effective Factor on Feeling of School Adjustment in Junior High-school Students (3)

- adjustment to club activities and total school adjustment -

橘川真彦・高野玲子\*

KIKKAWA Masahiko TAKANO Reiko

## 【問題と目的】

橘川・高野（2005）は、中学生における学校適応感（Feeling of School Adjustment）に関し、「友人関係適応感」「教師関係適応感」「学習活動適応感」「進路問題適応感」「部活動適応感」の5因子、各8項目計40項目からなる中学生用学校適応感尺度を作成した。そこでは、学校適応を、単にストレスの身体症状がなく、規則や慣行に少しもはずれることのないという消極的な見方ではなく、児童生徒自らが、積極的に学校活動や友人関係に挑み、自らを成長させる教育的課題であると位置づけている。

また、橘川・高野（2006）では、この5因子のうち対人関係適応に関する「友人関係適応感」及び「教師関係適応感」を特に取り上げ、それらに影響する要因を明らかにしようと試みた。さらに、橘川・高野（2007）では、学習活動領域における適応感である「学習活動適応感」及び「進路問題適応感」を取り上げ、それらに影響する要因を分析した。

前者の研究の結果は、次の通りである。①学校魅力と友人関係及び教師関係適応感とは、正の有意な相関関係が認められる。②友人関係の営みを学校魅力と感知することは、友人関係適応感を高めるとともに、その友人関係適応感の高まりが友人関係を学校魅力として感じさせるという循環を繰り返す。③学校行事などの集団活動の営みに魅力を感じる生徒の友人関係適応感が高い。学校行事等を通して、対人関係適応能力や社会的スキルの育成が望まれる。④学校における食に関する行動と友人関係適応感とは関連がある。⑤教師との関係が良好なことと友人関係適応感とは関連している。⑥教師との関係を学校魅力と感知している生徒は、教師関係適応感が高く、複数教師による連携指導や教育実習生の活用も、今後の学校適応問題を改善するポイントとなる可能性がある。⑦教師と一緒に企画・立案・実施するような非日常的な学校行事は、教師の持つ新たな側面を発見・感じさせる機会ともなり、学

---

\* 那須烏山市立荒川中学校

校行事を対人関係適応感を高める指導場面として生かすべきである。⑧遊びや自由な時間を通して、ストレスを発散したり心を解放できる生徒の友人関係及び教師関係適応感が高い。⑨進路学習に魅力を感じている生徒の教師関係適応感が高い。⑩学校内での委員会活動及び学級内での係活動に、充実感、自己有用感及び安定感を感じている生徒はそうでない生徒に比べ、友人関係適応感及び教師関係適応感が高い。これらの活動において役割を持たせ遂行させる体験は、生きる手応えを生徒に与え、対人関係適応感を高める要因となる。⑪総合教科好嫌度と友人関係及び教師関係適応感とは正の有意な相関があり、後者の方に強い傾向が認められる。⑫学業成績の自己認知と友人関係及び教師関係適応感とは、独立している。

後者の分析では、次のような結果が得られている。①学校魅力と学習活動適応感及び進路問題適応感とは、それぞれ正の有意な相関関係が認められる。②複数教員による連携指導や教育実習生の存在に魅力を感じる生徒の学習活動適応感が高い。③学業成績の向上に魅力を感じる生徒の学習活動適応感が高く、生徒の成績向上の実現とその実感が学習活動適応感を高める重要な要因である。④進路学習に対する魅力と学習活動適応感とは関連が認められる。⑤自習時間及び文化祭に魅力を感じている生徒の学習活動適応感が高い。⑥進路学習への魅力と進路問題適応感とは相互に関連しあっている。⑦教育実習生・友達・先生といった対人関係における喜びや期待に魅力を感じることと進路問題適応感とは深く関連している。⑧ボランティア活動等社会との接点を含む校外活動への魅力は、進路学習適応感を高めるよう作用している。⑨遠足や文化祭等特別活動としての非日常的な学校行事への魅力と進路問題適応感とに関連が認められる。両者には主体性や達成感といった共通要素が媒介していると考えられる。⑩学業成績の向上に魅力を感じることは、進路問題適応感を高める要因のひとつである。⑪学校内での委員会活動及び学級内での係活動に、充実感、自己有用感及び安定感を感じている生徒はそうでない生徒に比べ、学習活動適応感及び進路問題適応感が高い。これら活動において役割を持たせ遂行させる体験は、生きる手応えを生徒に与え、学習や進路に対する適応感を高める要因となる。⑫総合教科好嫌度と学習活動適応感及び進路問題適応感とは正の有意な相関があり、特に前者に強い関係が認められる。⑬自己認知による学業成績と学習活動適応感とには正の有意な相関が認められ、学業成績向上の保証が学習活動適応感を高める大きな要因である。

これらの結果は、学校魅力、委員会活動及び学級会活動における係活動、教科の好嫌度は、4つの学校適応感下位尺度と密接に関係しており、学校生活における各適応感に影響する要因であることを示唆している。ただし、個別の学校魅力項目との関連にはそれぞれ固有の関係が認められ、また自己認知された学業成績の高低の要因は、対人関係領域適応感とは直接的な関連性がないが、学習活動領域とは強い関連があるという特徴が明らかにされた。

ところで、文部科学省（2005）によれば、平成15年度に30日以上学校を欠席した全国の児童生徒（公立小・中学校）124,042人のうち、不登校状態となった直接のきっかけとして、学校生活に起因す

る「クラブ活動、部活動への不適応」をあげる者は1.2%（1,436人）と、割合としては小さいがその原因となっている。また、中学校でこれを原因としているのは1.4%（1,387人）、小学校では0.2%（49人）となっている。割合こそ小さいが、「クラブ活動、部活動への適応」問題が不登校のきっかけの一つの要因となっていることは否定できない。

角谷・無籐（2001）は、「部活動継続者にとっての中学校部活動の意義－充実感・学校生活への満足度とのかかわりにおいて－」の研究で、「特に、クラスでの欲求満足度の低い中学生にとって、部活動は学校生活への満足度を高めてくれる要因となりうることを実証している。学校適応感を扱うとき、対人関係領域や学習活動領域だけでなく、中学生が放課後や土曜日・日曜日などに多くの時間を費やす特別活動である部活動領域における適応の問題は無視できない要因であろう。

部活動は、教育課程外の活動であり、学年を超えクラスを超えて、積極的に自由に参加を希望する生徒によって構成され活動が営まれる点に、その特徴がある。通常教育課程での活動に比べて、活動内容も活動時間も比較的自由であり、生徒自身による運営も重視される。このようなことから、通常教育課程での活動では得難い、幅広く深い対人関係や集団活動経験を積む重要な機会となり、生徒の人格形成においてその教育効果には期待されるところ大である。本研究対象となった中学校でも、生徒全員が部活動に加入しており、部活動への適応感が学校生活全体の適応感の一要因を構成しているものと思われる。ただしこの場合、部活動における充実感や対人関係が学校適応にプラスに働くとともに、部活動の成績や対人関係等が新たなストレスの源泉になることも同時に考えておかねばならないであろう。

橘川・高野（2006、2007）では、不登校等様々な問題行動の予防策を求めるべく中学生を対象として、「友人関係適応感」「教師関係適応感」「学習活動適応感」「進路問題適応感」の4下位尺度と、それらに影響する要因を分析してきたが、本研究はその分析の続きである。本研究の第1の目的は、教育課程外活動領域のうち、部活動適応感を取り上げて、それらに影響をしている要因を明らかにすることである。第2の目的は、学校適応感の各下位尺度毎ではなく、総合的な学校適応感の観点から、5因子40項目すべてをまとめた「総合学校適応感」に関して、それらに影響する要因を分析することである。いわば従来まで報告してきた一連の研究報告のまとめに位置づく検討である。

具体的な分析の観点は、まず第一に、学校魅力と部活動適応感及び総合学校適応感との関連を検討することである。森田（1991）は、多くの児童生徒が登校回避感情を持っていても欠席せずに登校しているのは、児童生徒を学校に引きつける吸引力（引力）が、ストレスなど学校を離れていく力を上回るからだとしている。また、本間（2000）は、何らかの形で生徒が学校生活に魅力を感じて登校することが、欠席願望ひいては不登校の予防に最も有効であると指摘している。児童生徒を学校に引きつける引力や魅力すなわち学校魅力と、学校での部活動適応感及び総合学校適応感との関連が明らかになれば、学校魅力を通じてこれら適応感を高める可能性が考えられるとともに、部活動及び学校活

動全般における適応感の改善が学校魅力をさらに向上させ、両者のよりよい循環により、充実した学校生活を保証することにもなるであろう。

第二に委員会活動と部活動適応感及び総合学校適応感との関係、第三に学級における係活動と2つの適応感との関連についてみる。内藤（1985）は、生きる手応えを感じさせる教育の手立てとして、①安定感（愛情や理解の要素；気持ちを理解してくれる実感からくる）、②充実感（力や厳しさの要素；打ち込む活動を通して感じられる）、③自己有用感（自己の存在意味や価値につながる要素；自分もみんなの役に立っているという実感）の3つの構えを提言している。学校生活において、この3つのいずれかまたはいくつかを生徒が感じ取ることができれば、生き生きとした学校生活をおくれ、部活動領域や学校生活全般の適応もよくなるはずである。本研究では、安定感・充実感・自己有用感を感じとることが比較的容易に可能であることが予想される活動として、生徒の誰もが役割を与えられそれを遂行する委員会活動及び学級における係活動に特に焦点を当て、部活動領域及び学校生活全般における適応感への影響について検討したい。

第四に、教科の好嫌度及び学業成績と、部活動適応感及び総合学校適応感との関連について検討する。学校における中心的活動である学習活動が、部活動への適応感または学校生活全般における適応感を促進する要因となれば、教科の好嫌度及び学業成績と、部活動適応感及び総合学校適応感とは、強い関連があるはずである。

なお、本研究で分析に用いるデータは、橘川・高野（2004、2005）で得られたデータである。

## 【方法】

### 1. 調査対象者 公立中学校1校1～3年生、272（123、女子149名）

1年生104名（男子56名、女子48名）

2年生 82名（男子33名、女子49名）

3年生 86名（男子34名、女子52名）

### 2. 調査時期 2003年7月

### 3. 調査手続き クラスごとの集団で実施し、調査用紙は学級担任が配布・回収した。

### 4. 調査内容

#### (1) 中学生用学校適応感尺度

橘川・高野（2005）の作成した尺度のうち、部活動適応感に関する下位尺度（8項目、得点範囲8～48点）及び総合学校感尺度（40項目、得点範囲40～240点）の結果を使用した。クロンバックの $\alpha$ 係数は、部活動適応感尺度.92、総合学校適応感尺度.94であり、信頼性は非常に高い。

#### (2) 学校魅力

大学1・2年生137名（男子40名、女子97名）を対象とした自由記述法による予備調査（2003年4

月実施)及び中学校教員5名・高校生5名・中学生5名に対するインタビューにより得られた、中学校生活において感じられる(た)魅力項目22項目(表1-1及び表2-1参照)を選択肢とした。選択数制限をしない多肢選択法である。問いかけ文は、「あなたは、学校でどんなことやどんな時に魅力を感じますか。あてはまる内容の数字をすべて○で囲んでください。中学生になって体験していないことは、想像で答えてください。」である。

なお、予備調査から得られた学校魅力のうち、次の(3)委員会活動及び(4)学級の係活動は、調査対象となった学校では全員が何らかの役割を与えられており、全員が回答可能であること及び、本研究の目的との関係から、設問を独立させた。

### (3) 委員会活動

所属している委員会を選択し、その委員会活動で得られる充実感(1.やりがいがある、2.やりがいがない)、自己有用感(1.役に立っていると思う、2.役に立っていないと思う)、安定感(1.みんなから認められている、2.みんなから認められていない)の3側面について、それぞれ2件法で回答を求めた。

### (4) 学級の係活動

所属している学級の係活動を選択し、その係活動で得られる充実感(1.やりがいがある、2.やりがいがない)、自己有用感(1.役に立っていると思う、2.役に立っていないと思う)、安定感(1.みんなから認められている、2.みんなから認められていない)の3側面について、2件法で聞いた。

### (5) 教科の好嫌度

9教科及び総合的な学習の時間の計10項目について、「1.とても嫌い」から「5.とても好き」までの5件法により回答を求めた。

### (6) 学業成績の自己認知

一学期の学業成績について、学年の中で「1.上の方である」から「7.下の方である」までの7件法により自己評価を求めた。

## 【結果及び考察】

### 1. 部活動適応感に影響する要因

この下位尺度を構成する項目は、以下の8項目である。18.部活動はやりがいがある(因子負荷量.836、以下同様)、23.部活動に集中できる(.822)、3.部活動があるから学校は楽しい(.788)、8.部活動に一生懸命取り組んでいる(.773)、13.部活動は自分の生活になくてはならないものである(.767)、28.部活動ではみんなと協力してやっている(.637)、33.部活動で、部員として仲間に受け入れられている(.597)、48.部活動では、学年の異なる仲間ともうまくやっている(.487)。

これらは、課外活動である部活動に充実感を感じ熱中できることや、部活動での異学年及び同学年

の仲間との関係が良好であることを意味する内容から構成されている。尺度の平均値は35.31、標準偏差9.09である。この尺度得点の平均値は、5つの適応感下位尺度中友人関係適応感に次いで第2位の高さである。学年別では、1年生が最も高く、2年生と3年生の間には有意差はない（橘川・高野、2005）。

#### （1）学校魅力と部活動適応感

学校魅力22項目について、魅力を感じる項目に1点を与え、22項目を合算した得点を学校魅力得点とした。この学校魅力得点と部活動適応感得点との相関係数を求めたところ $r=.36$  ( $p<.01$ )と、やや低いが正の有意な相関が得られた。このことは、学校魅力を多く感じている生徒ほど、部活動適応感が比較的高い傾向があることを示唆している。もちろん両者の因果関係を考えると、学校魅力が高いから部活動適応が良好傾向にあるのか、その逆に部活動適応が良好だから学校魅力を高く感じる傾向があるのかは、判断が難しい。おそらく両者は相互作用的に働いていると考える方が妥当であると思われる。

次に、学校魅力22項目それぞれについて、魅力を感じている生徒（魅力群）と感じていない生徒（非魅力群）の部活動適応感得点を比較した。結果は表1-1に示した。表では、基本的には魅力を感じている生徒の割合が高い順に項目を並べ替えてある。

魅力群と非魅力群の部活動適応感得点の平均値をt検定（等分散性はLevene法によって検定）した結果、統計的に有意差のあった項目は、22項目中13項目であった。具体的には、次の項目である。

1.友達に会える（魅力群 35.96>非魅力群 31.66, $p<.05$ ）、5.遠足（修学旅行）がある（魅力群 36.56>非魅力群 32.98, $p<.01$ ）、18.休み時間遊ぶことができる（魅力群 36.29>非魅力群 33.58, $p<.05$ ）、7.文化祭がある（魅力群 36.89>非魅力群 32.99, $p<.01$ ）、4.給食がある（魅力群 36.88>非魅力群 33.07, $p<.01$ ）、6.体育祭がある（魅力群 38.38>非魅力群 32.20, $p<.01$ ）、10.作品展、コンクール、部活動などの大会で好成績をとる（魅力群 40.31>非魅力群 32.11, $p<.01$ ）、8.合唱コンクールがある（魅力群 37.93>非魅力群 33.99, $p<.01$ ）、9.球技大会がある（魅力群 37.59>非魅力群 34.44, $p<.01$ ）、16.授業中、校外に出て活動する（魅力群 37.78>非魅力群 34.62, $p<.05$ ）、19.学業成績が伸びる（魅力群 37.55>非魅力群 34.66, $p<.05$ ）、21.学級会でレクリエーションがある（魅力群 37.80>非魅力群 34.78, $p<.05$ ）、2.先生に会える（魅力群 38.73>非魅力群 34.78, $p<.01$ ）。

以上の結果から、次のようなことがいえよう。第一に、非日常的な学校行事等特別活動や教課外活動に魅力を感じる生徒ほど、部活動適応感が高いといえる。特に、部活動適応感得点において、魅力群と非魅力群との間の平均値の差が最も大きかったのは、「10.作品展、コンクール、部活動などの大会で好成績をとる」の8.20ポイントである。同様に、「5.遠足（修学旅行）がある」「7.文化祭がある」「6.体育祭がある」「8.合唱コンクールがある」「9.球技大会がある」「21.学級会でレクリエーションがあ

る」の各項目に魅力を感じる生徒は、魅力を感じない生徒よりも、部活動適応感が高い。文化活動にしろスポーツ活動にしろ地道な努力の結果、好成績を得ることに魅力を感じることは、部活動適応感と共通するものがあるといえよう。また、いずれも教科学習を中心とした活動とは異なり、日常的な学校生活に変化を与える活動である点で共通している。そこには、特別活動や教課外活動一般に通じる学校適応の領域が存在すること及び、教科学習等において生じるストレスを特別活動や教課外活動が発散・解消することや補償作用として役立っているということも示唆されていよう。部活動を始めとする教課外活動において、生き生きと充実した学校生活を送っている健全な中学生の姿が思い浮かぶ。

第二に、「1.友達に会える」「2.先生に会える」ことを学校魅力としてあげている生徒は、そうでない生徒よりも部活動適応感が有意に高い。このことは、部活動を通じての友達や部活動の顧問教員と接触・交流することへの喜びや充実感が、多様な人間関係の営みが展開される部活動における適応感を高めていることを示している。また、一般的に対人関係に対して魅力を感じる生徒は、対人関係を抜きにしては成立しない部活動への適応感も高いとも考えられる。逆に言えば、部活動という異学年やクラスを超えた多様な人間関係を経験できる場は、対人関係スキルやストレス処理等の訓練の場として、十分意義のある教育機会であるといえよう。

第三に、「18.休み時間遊ぶことができる」「16.授業中、校外に出て活動する」に魅力を感じる生徒の部活動適応感は、そうでない生徒よりも得点が高い。日常の教室を離れ、のびのびと比較的自由に、生徒が活動できることは、やはり学習中心の教室を離れ生徒の主体性を重視する部活動に相通じる要素があることを示している。また、このことは、第一の非日常的な学校行事等に感ずる魅力との関係と、やや類似した関係であると思われる。部活動の良さは、学習活動とは異なる時空での主体的な営みと実存感を感じられるところにあるのではなかろうか。

第四に、「19.学業成績が伸びる」に魅力を感じる生徒は、魅力を感じない生徒よりも、部活動適応感が高い。このことは、中学生において、学業と部活動の両立が不可能でないことを示している。また、学業にも部活動にも積極的に取り組み、成長感や達成感を味わうという意味での共通する基本的な適応感の存在を示唆している。ややもすると部活動が学業の妨げになるという意見もあるが、本研究に関する限り、むしろ相互により循環関係が期待できるといえよう。中学生の本分である学業成績の向上と、部活動での適応との両者の交互作用を目指した指導が、今後とも望まれる。

第五に、「4.給食がある」に魅力を感じる生徒は、魅力を感じない生徒よりも、部活動適応感が有意に高い。飽食の時代といわれている今日のわが国においても、今回研究対象の中学生の約8割は学校給食に魅力を感じており、それが部活動適応感と無関係ではないことが示されている。部活動は、放課後に行われることが多く、時には激しい活動を必要とする。放課後まで体力や気力を保つためには、昼食は大切なエネルギー補給源となる。食は精神的健康のバロメーターともなるので、給食に魅

力を感じることで、適応状態のよい指標となろう。

表 1-1. 学校魅力項目別魅力群と非魅力群の部活動適応感得点の比較

学校魅力項目	魅力群			非魅力群			t 値
	M	SD	n	M	SD	n	
1.友達に会える	35.96 ( 8.61)		226	31.66 (10.97)		38	2.30*
5.遠足（修学旅行）がある	36.56 ( 8.59)		174	32.98 ( 9.62)		90	3.08**
18.休み時間遊ぶことができる	36.29 ( 8.69)		171	33.58 ( 9.59)		93	2.33*
7.文化祭がある	36.89 ( 8.67)		159	32.99 ( 9.26)		105	3.48**
4.給食がある	36.88 ( 8.05)		157	33.07 (10.06)		107	3.27**
6.体育祭がある	38.38 ( 6.97)		134	32.20 ( 9.95)		130	5.83**
11.調理実習がある	35.88 ( 9.07)		128	34.83 ( 9.12)		136	0.93ns
10.作品展、コンクール、部活動・・・#	40.31 ( 5.83)		104	32.11 ( 9.39)		160	8.75**
15.放課後の自由な時間がある	36.03 ( 9.30)		99	34.92 ( 8.97)		165	0.96ns
8.合唱コンクールがある	37.93 ( 8.05)		90	33.99 ( 9.33)		174	3.57**
9.球技大会がある	37.59 ( 7.85)		75	34.44 ( 9.41)		189	2.77**
3.好きな異性に会える	35.94 ( 8.74)		63	35.15 ( 9.21)		201	0.60ns
16.授業中、校外に出て活動する	37.78 ( 8.19)		60	34.62 ( 9.24)		204	2.39*
19.学業成績が伸びる	37.55 ( 8.10)		62	34.66 ( 9.29)		202	2.37*
22.教育実習生がいる	35.23 ( 9.50)		56	35.37 ( 9.01)		208	0.10ns
21.学級会でレクリエーションがある	37.80 ( 8.10)		49	34.78 ( 9.23)		215	2.11*
12.進路の学習がある	36.62 ( 8.28)		42	35.10 ( 9.24)		222	1.00ns
2.先生に会える	38.73 ( 7.14)		37	34.78 ( 9.27)		227	2.98**
14.自習の時間がある	37.83 ( 9.76)		35	34.96 ( 8.95)		229	1.75ns
17.ボランティア活動がある	36.30 ( 9.66)		33	35.20 ( 9.02)		231	0.65ns
20.複数の先生（TT）で教えてもらえる	37.45 ( 8.56)		29	35.08 ( 9.17)		235	1.33ns
13.性教育の授業がある	31.40 (10.71)		5	35.41 ( 9.07)		259	0.98ns
#10.作品展、コンクール、部活動などの大会で好成績をとる						*p<.05,**p<.01	

橘川・高野（2006）における対人関係適応感（友人関係及び教師関係）では、友人関係や教師関係といった対人関係、多くの学校行事など集団活動、ストレス発散と関係する自由時間、食に関する営み等を、学校魅力として感じることで、適応感に影響する要因であった。また、橘川・高野（2007）における学習活動適応感（学習活動及び進路問題）では、複数教師による指導、成績の向上、進路学習、自習時間、文化祭等、学習に直接関係した事柄に学校魅力を感じることで、適応感を左右する要因であった。本研究における部活動適応感では、教課外活動や非日常的な学校行事、友人関係や教師関係といった対人関係、日常の教室を離れた比較的自由な活動、成績の向上等に魅力を感じることで適応感に影響を及ぼしている。

このように見ると、対人関係適応感、学習活動適応感、部活動適応感とでは、その影響する要因が異なることは注目に値する。学校適応感の指導においては、適応分野によって影響する要因がそれぞれ異なり、固有の関係があることを念頭において指導することが大切であろう。



## (2) 委員会活動と部活動適応感

本研究での委員会活動は、福祉、緑化、生活、企画、広報、体育、保健、給食、図書、整備の10種である。各委員会に20～30人ずつ所属しているが、委員会別に適応感を統計的に比較することは、被験者数が少ないので危険が伴う。そればかりか、委員会の種類を取り上げることは、委員会活動の種類間の善し悪しの価値判断ともつながり、教育的に見て問題がある。したがって、ここでは委員会の種別を込みにして全体としての分析を行うこととする（以下同様とする）。結果は、表1－2に示した。

委員会活動に充実感を感じている生徒（「やりがいがある」充実感有群）は79.7%、感じていない生徒（「やりがいがない」充実感無群）は20.3%であり、約8割の生徒が委員会活動に充実感を感じている。両群の部活動適応感得点を比較すると、充実感有群36.40は充実感無群31.68よりも有意（ $p<.01$ ）に部活動適応感が高い。内藤（1985）は、充実感について、「厳しさが伴い、その厳しさに対して挑戦し、克服することによって充実感が感じられるのであって、気楽な生活、気ままな雰囲気では得られないものである」と述べている。内藤にしたがえば、充実感を感じ生きる手応えを確かに感じさせる委員会活動は、達成感や努力感を伴うものでなければならない。それは、部活動においても例外ではなかろう。委員会活動に充実感を感じる生徒は、同時に部活動にも充実感を感じており、部活動適応感も高いといえる。逆に、部活動適応感の高い生徒は、委員会活動においても充実感を感じる傾向が強いともいえよう。

また、委員会活動に自己有用感を感じている生徒（「役に立っている」有用感有群）は81.3%、感じていない生徒（「役に立っていない」有用感無群）18.7%であり、やはり約8割の生徒が委員会活動に有用感を感じている。両群の部活動適応感を見ると、有用感有群35.75の方が有用感無群33.85よりも得点は高い傾向にはあるものの、統計的有意差は認められなかった。

さらに、委員会活動に安定感を感じている生徒（「みんなから認められている」安定感有群）は75.9%、感じていない生徒（「みんなから認められていない」安定感無群）24.1%であり、充実感及び有用感よりも感じている生徒の割合はやや低くなっている。両群の部活動適応感をみると、安定感有群36.48は、安定感無群32.48よりも、有意（ $p<.05$ ）に高い得点を得ている。委員会活動において安定感を感じる生徒は、同時に部活動においても安定感を感じる傾向があり、部活動適応感も高いといえるのではなかろうか。

これらの結果から、学年の枠を超え全校的な役割を生徒一人一人が付与され、それを遂行する委員会活動は、学校生活における充実感・有用感・安定感を感じさせ、それは部活動適応感と、関連性が高いことが示唆される。特に「委員会活動はやりがいがある」という学校集団内での活動に対する充実感を感じさせる経験と、「みんなから認められている」という周囲から承認され安定感を感じる経験が、部活動適応感と相対的に強く関連している。特別活動としての委員会活動の指導においては、

部活動適応感を始めとする種々の学校適応感とも関連していることを念頭に置き、充実感・安定感を促す工夫が求められるであろう。

表 1－2. 委員会活動における充実感・有用感・安定感の有無と部活動適応感得点

項目	有 群			無 群			t 値
	M	SD	n	M	SD	n	
充実感	36.40 ( 8.53)		202	31.68 (10.45)		50	2.98**
有用感	35.75 ( 8.77)		205	33.85 ( 9.94)		48	1.31ns
安定感	36.48 ( 8.26)		184	32.48 (10.83)		58	2.59*

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

### (3) 学級の係活動と部活動適応感

学級内で行っている係活動は、学級委員長、学級副委員長、学級書記会計、黒板係、掲示係、生活の記録係、美化係、新聞係、連絡係、教科連絡係、朝の学習係、その他の12種である。本調査では、教科連絡係に大きく偏ることが特徴である。また、その他が割合が高く、クラスによって係活動の種類が異なっている。ここでも、前項の委員会活動同様の理由により、係活動の種別分析は控えることとする。結果は、表 1－3 に示した。

学級の係活動に充実感を感じている生徒（「やりがいがある」充実感有群）は65.2%、感じていない生徒（「やりがいがない」充実感無群）は34.8%であり、約 6 割強の生徒が学級の係活動に充実感を感じている。両群の部活動適応感得点を比較すると、充実感有群35.91は充実感無群34.08よりも得点は高い傾向にあるものの、有意差は認められなかった。

また、学級の係活動に自己有用感を感じている生徒（「役に立っている」有用感有群）は75.9%、感じていない生徒（「役に立っていない」有用感無群）24.1%であり、約 7 割強の生徒が学級の活動に有用感を感じている。両群の適応感を見ると、有用感有群35.95の方が、有用感無群33.95よりも適応感得点は高いものの、やはり有意差はなかった。

さらに、学級の係活動に安定感を感じている生徒（「みんなから認められている」安定感有群）は68.9%、感じていない生徒（「みんなから認められていない」安定感無群）31.1%であり、約 7 割弱の生徒が安定感を感じている。両群の部活動適応感では、安定感有群36.65は、安定感無群32.96よりも有意（ $p<.05$ ）に高い得点を得ている。

前項の委員会活動と比較すると、充実感・有用感・安定感を感じている生徒の割合はやや低くなっている。学級内という限られた空間や人間関係で閉じている活動だからだろうか。それでも約 7 割前後の生徒は、係活動に充実感・有用感・安定感を感じている。

学級における係活動はその活動の種類や付与される役割が様々であっても、実際に役割を果たすことを通して、安定感を感じさせ、部活動適応感と関連しているといえる。したがって、学級内におい

て何らかの係を任せて、役割を遂行させる指導も、学校全体での取り組みである委員会活動と並び、部活動適応感を高める基底的要因あるいは間接的要因として働いていると思われる。

表 1－3．学級の係活動における充実感・有用感・安定感の有無と部活動適応感得点

項目	有 群			無 群			t 値
	M	SD	n	M	SD	n	
充実感	35.91 ( 8.73)		160	34.08 ( 9.81)		85	1.50ns
有用感	35.95 ( 8.55)		190	33.95 (10.52)		60	1.34ns
安定感	36.65 ( 7.64)		163	32.96 (11.30)		76	2.59*

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

#### (4) 教科の好嫌度・成績の自己認知と部活動適応感

9教科及び総合的な学習の時間の計10項目について、項目得点を合算したものを総合教科好嫌度とした（得点範囲10～50点）。総合教科好嫌度及び各教科等の好嫌度と、部活動適応感得点との相関係数を表1－4に示した。

総合教科好嫌度得点と部活動適応感得点との関係では、 $r=.35$  ( $p<.01$ )と正の有意な相関が得られている。総合的に見た場合の教科等の好嫌度が高い生徒ほど、部活動適応感が高いといえる。このことは、先に見たように、成績向上を学校魅力として感じる生徒の部活動適応感が高い結果と類似している。複数教科にわたっての教科の好嫌度が高いこと、すなわち学習面での適応の良さと、部活動適応感とは、相関連していることが明らかにされたといえる。適応感における学習活動と部活動の相互関連性に着目した適応指導のヒントが得られたといえよう。

次に各教科等ごとに、部活動適応感得点との相関を見ると、美術 $r=-.03$ nsを除き、保健体育 $r=.35$  ( $p<.01$ )、音楽 $r=.24$  ( $p<.01$ )、総合的な学習の時間 $r=.22$  ( $p<.01$ )、技術家庭 $r=.21$  ( $p<.01$ )、社会 $r=.20$  ( $p<.01$ )、英語 $r=.20$  ( $p<.01$ )、国語 $r=.15$  ( $p<.05$ )、数学 $r=.14$  ( $p<.05$ )、理科 $r=.12$  ( $p<.05$ )の順に、10項目中9項目とに、正の有意な相関が得られている。とりわけ、保健体育、音楽、総合的な学習の時間等の科目との相関が高いことが特徴である。部活動の内容と共通した活動であるためと思われる。

学校において、各教科等といった学校本来の活動である学習活動が好きであることは、一見無関係であるような部活動適応感とかなりの程度関係している。教科の好嫌度と部活動適応感とは相互作用的な関係にあるといえよう。

次に、一学期の学業成績について、学年の中で「1.上の方である」から「7.下の方である」までの7件法により自己評価を求めた結果（得点は反転させてある）である自己認知による学業成績と、部活動適応感得点との関係を見ると、 $r=.15$  ( $p<.05$ )と有意な低い正の関係が認められた。したがって、学業成績の良い生徒ほど、部活動適応感がやや高い傾向があるといえよう。先に見たように、成績向

上を学校魅力として感じる生徒の部活動適応感が高いという結果、及び複数教科にわたっての教科の好嫌度が高いことと部活動適応感とは相関連している結果と、かなり共通した結果である。学習活動における適応と部活動適応とは、学校適応感の面からは切っても切り離せない関係にあるといえる。学習指導と課外活動指導との調整・融合の重要性を教師は再認識すべきであろう。

表 1－4. 教科の好嫌度・成績の自己認知と適応感との相関関係

教科等	部活動適応感	総合学校適応感
総合教科好嫌度	.35**	.57**
国語	.15*	.26**
社会	.20**	.30**
数学	.14*	.31**
理科	.12*	.33*
英語	.20**	.31**
音楽	.24**	.24**
美術	-.03ns	.09ns
保健体育	.35**	.35**
技術家庭	.21**	.30**
総合学習	.22**	.29**
成績の自己認知	.15*	.22**

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

## 2. 総合学校適応感に影響する要因

本尺度の得点は、5 下位尺度40項目の合計である。平均は459.65、標準偏差31.23である。学年×性の2 要因の分散分析の結果、学年の主効果のみ見られている。1 年生から2 年生にかけて得点が低くなり、3 年生ではほぼ回復するというV字型の変化を示すことが特徴である（橘川・高野、2005）。

### (1) 学校魅力と総合学校適応感

学校魅力得点と総合学校適応感得点との相関係数を求めたところ $r=.44$  ( $p<.01$ ) と、正の有意な相関が得られた。このことは下位尺度における各適応感と同様に、学校魅力を多く感じている生徒ほど、総合学校適応感が高い傾向があることを意味している。ここでも両者の因果関係は、相互作用的に働いているものと考えられる。

また、学校魅力22項目それぞれについて、魅力を感じている生徒（魅力群）と感じていない生徒（非魅力群）の総合学校適応感得点を比較した。結果は表 2－1 に示した。この表でも、基本的には魅力を感じている生徒の割合が高い順に項目を並べ替えてある。

魅力群と非魅力群の総合学校適応感得点の平均値を t 検定（等分散性はLevene法によって検定）

した結果、統計的に有意差のあった項目は、22項目中16項目であった。具体的には次の項目である。

1.友達に会える（魅力群 162.96>非魅力群 141.83, $p<.01$ ）、5.遠足（修学旅行）がある（魅力群 165.09>非魅力群 149.54, $p<.01$ ）、18.休み時間遊ぶことができる（魅力群 163.54>非魅力群 153.30, $p<.05$ ）、7.文化祭がある（魅力群 166.53>非魅力群 149.22, $p<.01$ ）、4.給食がある（魅力群 164.63>非魅力群 152.93, $p<.01$ ）、6.体育祭がある（魅力群 169.00>非魅力群 149.92, $p<.01$ ）、10.作品展、コンクール、部活動などの大会で好成績をとる（魅力群 168.14>非魅力群 154.60, $p<.01$ ）、15.放課後の自由な時間がある（魅力群 166.10>非魅力群 156.13, $p<.05$ ）、8.合唱コンクールがある（魅力群 168.49>非魅力群 155.35, $p<.01$ ）、16.授業中、校外に出て活動する（魅力群 171.85>非魅力群 156.62, $p<.01$ ）、19.学業成績が伸びる（魅力群 167.98>非魅力群 157.42, $p<.05$ ）、22.教育実習生がいる（魅力群 171.39>非魅力群 157.05, $p<.01$ ）、12.進路の学習がある（魅力群 175.15>非魅力群 156.86, $p<.01$ ）、2.先生に会える（魅力群 180.79>非魅力群 156.55, $p<.01$ ）、14.自習の時間がある（魅力群 175.36>非魅力群 157.93, $p<.01$ ）、20.複数の先生（TT）で教えてもらえる（魅力群 178.52>非魅力群 157.81, $p<.01$ ）。

これらの結果から、次のことがいえるであろう。第一は、「1.友達に会える」ことを学校魅力としてあげている生徒は、そうでない生徒よりも総合学校適応感得点が有意に高い。古市・玉木（1994）では、学校生活享受感に最も寄与率の高い要因は級友適応であり、友人関係のありようが享受感を規定していることを示している。また中元（1990）も、学校生活が楽しいのは「友達と気が合い、話はずむとき」であり、学校生活の楽しい理由は「同性の友達がいる」からだとしている。本研究でも、「1.友達に会える」ことを8割以上の生徒が学校魅力として感じており、しかも感じている生徒は感じていない生徒よりも総合学校適応感得点が高いことが示されている。このように見ると、中学校生活において学校適応感を総合的に高める要因は、友人関係に関する学校魅力が極めて重要であることが、改めて確認されたといえよう。友人関係を楽しめる場と時間を提供することや適切な指導が、総合的な学校適応感を保証する要因となるであろう。

第二は、「2.先生に会える」「20.複数の先生（TT）で教えてもらえる」及び「22.教育実習生がいる」に魅力を感じている生徒は、そうでない生徒と比べ有意に総合学校適応感得点が高い。「2.先生に会える」に魅力を感じている生徒の割合は約1割と低いものの、魅力を感じている生徒の総合学校適応感得点は平均値で180を超え、他の魅力項目よりも最も高い得点となっている。生徒からみれば、教育実習生も教師としてみているので、教師との人間関係に学校魅力を感じることは、学校適応感を総合的に高める要因であることは明らかである。中学生において総合学校適応感を高める一つの方策としては、生徒にとって魅力ある教師が存在すること、少人数制の学級編成をして生徒がより身近に教師を感じることでできる学習形態を作っていくこと、新鮮で初々しい教育実習生の受け入れ、教師－生徒間の円滑な人間関係とその魅力を確立することなどが考えられよう。

第三には、「5.遠足（修学旅行）がある」「7.文化祭がある」「6.体育祭がある」「10.作品展、コンク

ール、部活動などの大会で好成績をとる」「8.合唱コンクールがある」に魅力を感じている生徒は、そうでない生徒と比べ有意に総合学校適応感得点が高い。このことは、非日常的な学校行事活動に魅力を感じている生徒ほど、総合学校適応感が高いことを意味している。日々の日常的な学校生活に変化を加える特別活動等の時間は、中学生にとっても魅力があり、学校生活に潤いと新鮮さを持たせる要因となっていることを示唆している。学校週5日制の導入により特別活動や学校行事の時間が削減される方向にあるが、生徒が学校生活全体に適応するという観点から見ると、これらの時間の確保や年間計画に基づく効率的な学校行事の運営は、今後とも必要となるであろう。

第四に、「4.給食がある」に魅力を感じている生徒の総合学校適応感得点も、魅力を感じていない生徒よりも有意に高い。飽食の時代といわれている今日の我が国においても、今回の研究対象となった生徒の約6割は学校給食に魅力を感じており、それが総合学校適応感を高める要因となっている。中学生にとっての給食の時間は、食べ盛りの生徒の空腹を満たしてくれる時間であり、また、長い一日の学校生活におけるひとときの安らぎの時間でもあり、大切にしたい学校魅力の一つである。先の部活動適応感の項でみてきたように、食は健康のバロメーターであり、給食に魅力を感じられることは、学校生活全般における適応の一指標となろう。

第五に、「12.進路の学習がある」に魅力を感じる生徒は16.0%と割合が小さいものの、この項目に魅力を感じている生徒の総合学校適応感得点は、魅力を感じていない生徒よりも有意に高い。現実的には多くの中学生にとって、中学校生活の重要な関心事は、高校進学等の進路の問題であろう。自分の将来の生活や職業について関心を示し、進路学習に魅力を感じる生徒は、将来への時間的展望がもてる生徒であると考えられる。時間的展望を持つことは中学生にとって困難な課題ではあるが、進路を中心として将来を模索させる学習を魅力的に進めることも、総合学校適応感を高める要因の一つとなろう。

第六に、「18.休み時間遊ぶことができる」「15.放課後の自由な時間がある」「16.授業中、校外に出て活動する」「14.自習の時間がある」に魅力を感じる生徒の総合学校適応感得点は、そうでない生徒よりも得点が高い。日常の教室を離れたり、のびのびと比較的自由に生徒が主体的に活動できることに、魅力を感じることでできる生徒は、総合的な学校適応が良好であることを示している。また、このことは、第三の非日常的な学校行事等に感ずる魅力や第一の友人関係魅力等との関係と、関連しているように思われる。

第七に、「19.学業成績が伸びる」に魅力を感じる生徒は、魅力を感じない生徒よりも、総合学校適応感得点が高い。中学生において学校生活の大半の時間は、授業を通しての学習活動に費やされる。学習活動の結果、現実の学業成績が伸び、その伸びを実感できることは、総合的な学校適応感を高める要因の一つといえよう。総合学校適応感の観点からも、教師は分かり易い授業を心がけ、確実に生徒の成績を伸ばし、そのことが実感できるよう授業や教材の準備に取り組み、評価方法についても工

夫することが大切である。

表 2-1. 学校魅力項目別魅力群と非魅力群の総合学校適応感得点の比較

学校魅力項目	魅力群			非魅力群			t 値
	M	SD	n	M	SD	n	
1.友達に会える	162.96 (28.36)		209	141.83 (39.38)		35	3.06**
5.遠足（修学旅行）がある	165.09 (29.48)		163	149.54 (31.55)		81	3.79**
18.休み時間遊ぶことができる	163.54 (30.57)		158	153.30 (30.86)		86	2.49*
7.文化祭がある	166.53 (28.83)		151	149.22 (31.54)		93	4.40**
4.給食がある	164.63 (28.33)		146	152.93 (33.52)		98	2.84**
6.体育祭がある	169.00 (25.86)		128	149.92 (33.15)		116	4.98**
11.調理実習がある	163.02 (29.83)		118	157.04 (31.90)		126	1.51ns
10.作品展、コンクール、部活動・・・#	168.14 (27.52)		96	154.60 (32.03)		148	3.40**
15.放課後の自由な時間がある	166.10 (28.11)		93	156.13 (32.15)		151	2.46*
8.合唱コンクールがある	168.49 (26.42)		85	155.35 (32.34)		159	3.42**
9.球技大会がある	164.03 (28.98)		69	158.31 (31.61)		175	1.30ns
3.好きな異性に会える	164.61 (32.49)		59	158.44 (30.44)		185	1.33ns
16.授業中、校外に出て活動する	171.85 (23.24)		53	156.62 (32.10)		191	3.86**
19.学業成績が伸びる	167.98 (29.30)		58	157.42 (31.16)		186	2.29*
22.教育実習生がいる	171.39 (28.90)		49	157.05 (30.91)		195	2.94**
21.学級会でレクレーションがある	167.49 (26.89)		43	158.31 (31.63)		201	1.77ns
12.進路の学習がある	175.15 (27.53)		41	156.86 (30.81)		203	3.53**
2.先生に会える	180.79 (24.29)		34	156.55 (30.68)		210	4.39**
14.自習の時間がある	175.36 (29.41)		28	157.93 (30.69)		216	2.84**
17.ボランティア活動がある	167.31 (31.55)		29	158.93 (30.86)		215	1.37ns
20.複数の先生（TT）で教えてもらえる	178.52 (27.24)		25	157.81 (30.74)		219	3.23**
13.性教育の授業がある	154.20 (37.35)		5	160.05 (30.93)		239	0.42ns
#10.作品展、コンクール、部活動などの大会で好成績をとる							*p<.05,**p<.01

外山・桜井（1999）は、大学生を被験者とした研究ではあるが、「褒められた」「授業が楽しかった」など自己に関するポジティブな日常的な出来事が、ストレス反応を抑え、健康とプラスの関係のあることを明らかにしている。以上みてきた個々の学校魅力要因も確かに、学校適応感を高める要因として重要であるが、それに加えて、日常的なささいなポジティブな出来事も、学校適応感の保証にとっても同時に大切なことであろう。教師は、生徒の学校魅力を高めるとともに、日常の学校生活において、たとえささいな出来事でもポジティブな感情を体験できるよう同時に工夫をしなければならない。

## （2）委員会活動と総合学校適応感

結果は、表 2-2 に示した。委員会活動に充実感を感じている生徒（「やりがいがある」充実感有群）と、感じていない生徒（「やりがいがない」充実感無群）の総合学校適応感得点を比較すると、充実感有群163.53は、充実感無群148.09よりも有意（ $p<.01$ ）に適応感が高い。

また、委員会活動に自己有用感を感じている生徒（「役に立っている」有用感有群）と、感じていない生徒（「役に立っていない」有用感無群）の総合学校適応感を見ると、有用感有群161.19の方が有用感無群153.56よりも得点は高い傾向にはあるものの、統計的有意差は認められなかった。

さらに、委員会活動に安定感を感じている生徒（「みんなから認められている」安定感有群）と、感じていない生徒（「みんなから認められていない」安定感無群）との比較では、安定感有群163.35は、安定感無群150.06よりも有意（ $p<.05$ ）に高い得点を得ている。

これらの結果は、全校的な委員会活動において充実感・有用感・安定感を感じていることと、総合学校適応感とは関連性があることを示唆している。とりわけ中学校における委員会活動においてやりがいがあると感じさせる指導と、みんなから認められる安定感を感じさせる指導が、総合学校適応感を改善する要因となることが考えられる。

表 2－2. 委員会活動における充実感・有用感・安定感の有無と総合学校適応感得点

項目	有 群			無 群			t 値
	M	SD	n	M	SD	n	
充実感	163.53 (29.05)		189	148.09 (35.50)		46	2.34**
有用感	161.19 (30.71)		190	153.56 (33.14)		43	1.45ns
安定感	163.35 (28.04)		172	150.06 (37.00)		54	2.43*

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

### (3) 学級の係活動と総合学校適応感

結果は、表 2－3 に示した。学級の係活動に充実感を感じている生徒（「やりがいがある」充実感有群）と、感じていない生徒（「やりがいがない」充実感無群）の総合学校適応感得点を比較すると、充実感有群164.03は、充実感無群153.24よりも有意（ $p<.05$ ）に高い適応感を示している。

また、学級の係活動に有用感を感じている生徒（「役に立っている」有用感有群）と、感じていない生徒（「役に立っていない」有用感無群）の総合学校適応感を見ると、有用感有群162.39の方が、有用感無群153.38よりも高い得点を得ているが、統計的には有意ではなかった。

さらに、学級の係活動に安定感を感じている生徒（「みんなから認められている」安定感有群）と、感じていない生徒（「みんなから認められていない」安定感無群）の総合学校適応感、安定感有群165.85は、安定感無群148.70よりも有意（ $p<.01$ ）に高い得点を得ている。

学級における係活動はその活動の種類や付与される役割が様々であっても、実際に役割を果たすことを通して、充実感・有用感・安定感を感じさせることができ、このような生徒は同時に総合学校適応感も高いといえよう。学級の係活動への取り組みが積極的であり、係活動に充実感や有用感や安定感を得ている生徒は、総合的な学校生活に対しても積極的前向きであり、適応感も高いのであろう。したがって、学級内において何らかの係を任せて、役割を遂行させる指導は、総合学校適応感を高める方向で作用している可能性があると考えられるので、係活動での充実感・有用感・安定感を感じさ



せる指導は、学校適応感全体に対する波及効果のあることを忘れてはならないであろう。

表 2－3．学級の係活動における充実感・有用感・安定感の有無と総合学校適応感得点

項目	有 群			無 群			t 値
	M	SD	n	M	SD	n	
充実感	164.03 (30.22)		147	153.24 (31.10)		82	2.56*
有用感	162.39 (29.92)		174	153.38 (34.18)		58	1.19ns
安定感	165.85 (26.54)		154	148.70 (36.45)		70	3.35**

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

#### (4) 教科の好嫌度・成績の自己認知と総合学校適応感

結果は、表 1－4 に示されている。総合教科好嫌度得点と総合学校適応感得点との関係では、 $r=.57$  ( $p<.01$ ) と正の有意な比較的高い相関が得られた。総合的に見た場合の教科等の好意度が高い生徒ほど、学校生活全般の適応感が良い傾向にあることは明らかである。やはり学校適応を考えるとときには、教科学習との関連は無視できない要因である。

次に各教科等ごとに、総合学校適応感得点との相関を見ると、保健体育 $r=.35$  ( $p<.01$ )、理科 $r=.33$  ( $p<.01$ )、数学 $r=.31$  ( $p<.01$ )、英語 $r=.31$  ( $p<.01$ )、社会 $r=.30$  ( $p<.01$ )、技術家庭 $r=.30$  ( $p<.01$ )、総合的な学習の時間 $r=.29$  ( $p<.01$ )、国語 $r=.26$  ( $p<.01$ )、音楽 $r=.24$  ( $p<.01$ ) と、美術 $r=.09ns$ を除き、いずれも正のやや低い有意な相関が得られている。

保健体育との相関が相対的に高いのは、学校適応感が、運動やスポーツによるストレス発散や、身体活動による実存感の確認等とも関連しているように思われる。理科と数学との相関は、理数系離れを克服することが、学校適応感と関連していることを示唆している。いずれにしても、学校において教科等といった学校本来の学習活動を好きにさせることが、総合的な学校適応感を高める要因であることは、明らかである。

さらに、自己認知による学業成績と総合学校適応感得点との関係を見ると、 $r=.22$  ( $p<.01$ ) とやや低い正の有意な相関関係が認められた。学業成績が高いと認知する生徒ほど総合学校適応感が良い傾向があるいえよう。したがって、総合的にみた学校適応の問題は、教科の好き嫌いと同様、学業成績と関係があると推察される。教師や学校が生徒の確かな学力と学業成績を保証することが、学校適応上の問題を解決する一つ要因であることを示唆している。

#### 【今後の課題】

本研究で明らかにされた部活動適応感及び総合学校適応感に影響する要因を、実際の学校における日常的な指導に意図的に取り入れ、その効果を確認する実践的な現場研究へと発展させる試みが、今後期待される。

## 【要約】

本研究は、不登校等種々の学校適応に関する問題行動の予防策を求めるべく、部活動適応感及び総合学校適応感の2つの適応感について取り上げ、これら適応感に関連したり高めたりする要因を明らかにすることを目的とした実証的研究である。質問紙調査法により、栃木県下の中学生1～3年生272人を対象にして得た調査データを分析した。

部活動適応感に関する結果は次の通りである。①学校魅力を多く感じている生徒ほど部活動適応感が高い ( $r=.36$ )。②非日常的な学校行事等特別活動や教課外活動に魅力を感じる生徒ほど部活動適応感が高い。③友達や教師との交流に魅力を感じる生徒の部活動適応感が高い。④日常の教室を離れ、比較的自由に活動できることに魅力を感じる生徒の部活動適応感が高い。⑤学業成績が伸びることに魅力を感じる生徒は部活動適応感も高い。⑥給食に魅力を感じる生徒の部活動適応感が高い。⑦委員会活動に、充実感や安定感を感じている生徒の部活動適応感が高い。⑧学級の係活動に安定感を感じている生徒の部活動適応感が高い。⑨総合教科好嫌度と部活動適応感とは正の相関 ( $r=.35$ ) がある。⑩自己認知による学業成績と部活動適応感とは低い正の相関 ( $r=.15$ ) がある。

総合学校適応感に関する結果は次の通りである。①学校魅力得点と総合学校適応感とは、正の有意な相関関係 ( $r=.44$ ) がある。②友達に会えることに魅力を感じる生徒ほど総合学校適応感が高い。③教師との人間関係に魅力を感じる生徒の総合学校適応感が高い。④非日常的な学校行事等特別活動や教課外活動に魅力を感じている生徒の総合学校適応感が高い。⑤給食に魅力を感じる生徒の総合学校適応感が高い。⑥進路学習に魅力を感じる生徒の総合学校適応感が高い。⑦日常の教室を離れ、比較的自由に活動できることに魅力を感じる生徒の総合学校適応感が高い。⑧学業成績が伸びることに魅力を感じる生徒は総合学校適応感も高い。⑨委員会活動に、充実感や安定感を感じている生徒の総合学校適応感が高い。⑩学級の係活動に充実感や安定感を感じている生徒の総合学校適応感が高い。⑪総合教科好嫌度と総合学校適応感とは正の相関 ( $r=.57$ ) がある。学校における教科等本来の学習活動を好きにさせることが総合的な学校適応感を高める要因である。⑫自己認知による学業成績と総合学校適応感とは低い相関 ( $r=.22$ ) がある。学業成績の保証も総合的にみた場合の適応感の一要因となりうる。

本研究の結果から、部活動適応感及び総合学校適応感を高めるためには、学校魅力を高めること、委員会活動・学級での係活動において充実感や安定感を感じさせること、教科学習を好きにさせること、学業成績を保証することなどが、明らかにされた。今後は、日々の教育実践において、これらのことに配慮した指導計画を心がけ、より実証的実践的研究へと発展させることが望まれる。

## 【引用・参考文献】

本間友己 2000 中学校の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理

学研究 48,pp.32-41.

橘川真彦・高野玲子 2005 中学生における学校適応感の構造と測定 宇都宮大学教育学部紀要  
第55号 第1部 pp.17-36.

橘川真彦・高野玲子 2006 中学生における学校適応感に影響を及ぼす要因(1) —友人関係適応  
感及び教師関係適応感について— 宇都宮大学教育学部紀要 第56号 第1部 pp.1-16.

橘川真彦・高野玲子 2007 中学生における学校適応感に影響を及ぼす要因(2) —学習活動適応  
感及び進路問題適応感について— 宇都宮大学教育学部紀要 第57号 第1部 pp.1-17.

文部科学省 2005 平成15年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(速報)  
文部科学省

森田洋司 1991 「不登校」現象の社会学 学文社

内藤勇次 1985 ひとりひとりを生かす特別活動の役割と課題 道徳と特別活動 2(7)

角谷詩織・無藤隆 2001 部活動継続者にとっての中学校部活動の意義 —充実感・学校生活への満  
足度とのかかわりにおいて— 心理学研究 Vol.72, No.2, 79-86.

外山美樹・桜井茂男 1999 大学生における日常的出来事と健康状態の関係—ポジティブな日常的出  
来事の影響を中心に— 教育心理学研究 47, pp.374-382.